第一話　橋の向こう側

荒々しい足音が近づいてきた。どぶ板を踏み抜くのではないかという勢いだ。
ちはるは四畳半の板間の隅で身をすくめた。
はがれかけた障子紙の向こうから、煙草と、酒と、鬢つけ油のにおいが漂ってくる
――大家だ。
「邪魔するよっ」
怒鳴り声が響くと同時に、腰高障子が勢いよく引き開けられた。はがれかけた障子紙が、ひらりと大きく揺れる。
建てつけの悪い障子を難なく開けて顔を出したのは、やはり大家であった。
ちはるは筵の上で唇を噛みながら、ぐいと顔を上げる。
「もう少しだけ待ってください。店賃は、きっと、必ず払いますから」
大家はいまいましそうに目を細めて、ちはるを睨みつけた。
「それが人にものを頼む態度かい。ふんぞり返って、生意気な」
ちはるは拳を握りしめ、床に手をついた。

「どうか――お願いいたします」

ゆっくり頭を下げると、大家の乾いた笑い声が土間に響いた。

九尺二間の裏長屋。ちはるが部屋の奥に引っ込んでいても、戸口は目と鼻の先だ。あざ笑うような大家の息遣いを間近に感じる。煙草と、酒と、鬢つけ油のにおいも、ちはるの鼻にぐっと迫ってきた。いつもより、においが濃い。

ほんの少しだけ顔を上げて、ちはるは鼻をうごめかせた。

わずかに混じっている、甘じょっぱい香りは何だろう。醤油のたれ――みたらし団子か――いや――かすかに魚のにおいもする――鰻か――？

大家は、ふんと鼻息を荒くした。

「嘘は勘弁しておくれよ。『きっと、必ず』と言い続けて、一向に払ってくれないじゃないか。払う当てなんか、どうせないんだろう？」

ちはるは我に返った。今は大家のにおいを気にしている場合ではないと、慌てて頭を下げ直す。

「店賃は、きっと、必ず払います。だから――」

「その台詞は聞き飽きたと言っているんだよ！」

頭を下げ続けるちはるの耳に、大家の声が突き刺さる。

「ふた親を亡くして、まだ日も浅い。かわいそうだから置いてやっているが、ここへ越し

てきてから、まだ一銭も払っていないじゃないかっ」
大家は拳を振り上げて、いきり立った。いつもより口臭がきつい。煙草と、酒と、鬢つけ油と、甘じょっぱいたれのにおいが、ちはるの顔の前でとぐろを巻いた。
うえっ――。
気持ち悪くなって、ちはるは口を覆った。
おそらく大家は夕べの酒くささをごまかそうとして、鬢つけ油を普段より多くつけたに違いない。煙草は、ついさっきまで吸っていたはずだ。そして、ここへ来る前に鰻屋へ寄ったのだろう。
口に手を当てたまま思わずじっと見つめれば、大家が眉をはね上げる。
「何だい、何か文句でもあるのかい」
ちはるは慌てて目をそらし、首を横に振った。だが大家は納得しない。
「不躾に人の顔をじろじろと見て、何を考えていたんだい。気に入らないことがあるんなら、今すぐ出ていってくれて構わないんだよっ」
「いえ、そんな……」
行く当てのない身だ。出ていけと言われても困る。
「店賃も払わずに居座られたって、こっちだって困るんだよ！　今日も手ぶらで帰ったら、うちのかみさんにまた雷を落とされちまう」

大家は、ふんと鼻を鳴らす。
「かみさんに頭が上がらない男だと、わたしを馬鹿にしているんだろう？　いつも変な目でわたしを見て」
「馬鹿にしてなんかいません！」
ちはるは口から手をはずし、大声を出した。
「わたしはただ、大家さんのにおいが気になっただけで」
大家は自分の着物に目を落とした。胸元に汚れがないか確かめるように手を当てたり、袖のにおいを嗅いだりする。
「何だよ。いったい何が、におうっていうんだい」
ちはるは唇を引き結んだ。正直に言ってよいものか。
しかし受けた誤解は解かねばならぬ。
自分の思いを強く主張できなかった過去に、ちはるは囚われていた。悔やんでも悔やみきれない自責の念にあとから激しく駆られるくらいならば、これからは何でも言おうと決めたではないか。
言わずに後悔より、言って後悔だ。でなければ、また苦しむことになる――。
ちはるは背筋を伸ばして、真正面から大家を見た。
「煙草と酒と鬢つけ油のにおいが、いつもよりきついです」

ずばっと言えば、大家が「うっ」と声を詰まらせた。
「たぶん夕べ、おかみさんに怒られるほど飲み過ぎてしまったんでしょう。酒のにおいをごまかすためか、いつもより鬢つけ油を多くつけましたよね？　出がけにも叱られたのか、いらいらしながら煙草を吸って、気晴らしに鰻か何か食べていらっしゃいました？」
「黙らっしゃい！」
大家は額に青筋を立てて、ちはるを睨みつける。
「おまえさん、何の根拠があって、そんな」
「においです」
ちはるは即座に言い返した。
「大家さんに染みついたにおいが、あたしに教えています。においは嘘をつきませんから」
大家は、むっと眉根を寄せた。
「どれだけ鼻が利くのか知らないが、かみさんに叱られたなんていうのは完全に当て推量だろう。壁の薄い長屋で、ぺらぺらと変な憶測を話すのはやめておくれっ」
ちはるは小首をかしげる。
「でも、大家さんがおかみさんの尻に敷かれているのは、長屋中のみんなが知っていますよ。さっきだって、大家さんご自身が『今日も手ぶらで帰ったら、うちのかみさんにまた

雷を落とされちまう』って、おっしゃったんじゃありませんか」
「ええい、うるさい！」
大家は手を振り上げて叫んだ。
「本当に可愛げのない娘だねっ。こんな憎まれ口を叩かれるなら、この長屋に置いてやるんじゃなかったよ。まったく」
大家は癇癪を起こしたように、わめき続ける。
「哀れな親子三人と思って、空いた部屋に入れてやったが、半年もしないうちに次々と死なれて、うちの長屋の評判もがた落ちだよ。呪われた長屋なんて言い出す者も現れたんだ。まったく、どうしてくれるんだい！」
ちはるは、ぐっと歯を食い縛った。
「どこの誰が『呪われた長屋』なんて言ってるんですか」
ぎろりと目に力を入れて睨めば、大家はひるんだように口をつぐむ。
ちはるは上がり口まで、ずいっと膝を進めた。
「うちのおとっつぁんとおっかさんが、この長屋を呪っているなんて、いったい誰が言い出したんです⁉　そもそも何のために、二人がこの長屋を呪うっていうんですか」
ちはるは皮肉めいた声を大家に投げた。
「大家さんが、戸の建てつけの悪い部屋をあてがったから？　それとも、はがれ落ちそう

な障子を直してくれなかったからですか。どこの誰から見ても、あたしたち親子が大家さんを恨んでいる境遇に見えたんですかねえ」

そうだと返事をするように、障子紙が風でひらんとめくれ上がった。

「それは、そのぅ……」

めくれ上がった障子紙を手で押さえながら、大家は宙に目を泳がせる。

「障子の張り替えはとっくに頼んであったんだが、まだ職人が来ないとは、おかしいねえ。戸のがたつきは、たいしたことないだろう。わたしはまったく気にならないよ。ほら、この通り――」

大家は開け放してあったままの腰高障子に手をかけた。閉めようと戸を引いたとたん、ぬっと外から出てきた手に阻まれる。

腰高障子を押さえたのは、いかにも柄の悪そうな中年男だ。色あせた着流しの前をはだけて、懐から匕首らしき物をちらりと覗かせている。

ちはるは顔をしかめた。

中年男から漂ってくる酒くささは、大家の比ではない。何日も風呂に入っていないような、むわっとした汗のにおい。安っぽい煙草のにおい。女の白粉と紅のにおい。すべてが不快に混ざり合っている。

大家が顔を強張らせて戸口から離れた。狭い土間なので、すぐ板間の上がり口に突き当

たる。大家はよろめいて、板間にどすんと尻をついた。
戸口に立った男は三人。みな人を馬鹿にしきったような薄笑いを浮かべている。ちはるの鼻先に、すえたような悪臭が押し寄せてきた。ちはるは口で息をする。
腰高障子を押さえたままの中年男を押しのけるように、でっぷり太った白髪頭の男が敷居を踏みつけて入ってきた。
「張り替えなんざ、はなっからする気はねえだろうがよ。ちょいと開け方にこつのいる戸も、店賃の取り立てでしょっちゅう出張ってくる大家でなきゃ、なかなかすぱっとは開けられねえよ」
大家は唇を震わせながら声をしぼり出した。
「ま、また来たのかい。この長屋への借金取りの出入りは、お断りだよ」
白髪頭の男は大家をななめに見下ろして、肩をすくめる。
「こっちだって、好きで出向いたわけじゃねえんだ。用がなけりゃ、こんな辛気くさい長屋になんか来るもんかよ」
白髪頭の男は外に向かって目配せをする。戸口の脇で待っていた若い男が風呂敷包みを板間に置いて、またすぐに外へ出た。
白髪頭の男が上がり口の前にしゃがみ込んで、風呂敷の結び目をほどく。中に入っていたのは、分厚い紙の束だ。

大家は口を半開きにして、目を見開いた。
「それ全部、借金証文かい……？」
白髪頭の男は楽しそうに笑って、ちはるを舐め回すように見る。
「誰がどう見たって、返しきれねえよなぁ。小娘一人の細腕じゃ、どうにもならねえよ。意地を張らずに、そろそろ、わしの話に乗ったらどうだ」
腰高障子に手をかけている中年男が、顔に似合わぬ猫撫で声を出す。
「おれたちに任せりゃ、悪いようにはしねえぜぃ。綺麗な着物を着せて、美味い物をたらふく食わせて、ふっかふかの布団で眠らせてやるよ。こんな貧乏長屋とは、さっさとおさらばしようぜぃ。溜め込んだ店賃も、ちゃあんと片づけてやるからよぉ」
ちはるは拳を震わせて、中年男を睨みつけた。
「そんな話、誰が信じるもんか。あんたたちに任せたら、待っているのは身の破滅だよっ」
白髪頭の男が腰を浮かせ、ちはるの顎に手をかけた。びくりと身を震わせた拍子に、うっかり鼻から息を吸ってしまって、ちはるは嘔吐きそうになった。
鼻から入ってきたにおいには香を焚いたような香りもあった。手下の二人のような汗くささはほとんどないが、その代わり、血のにおいが濃い。
男に染みついている腐臭は、死のにおいか。昨日今日こびりついたものではないだろう。

人の涙を吸った極悪のにおいが、男の体の芯から漂ってくる気がした。
肌に触れる太い指も気色悪い。大きな芋虫が顎にへばりついているようだ。ちはるは顔をそむけようとしたが、ぐいっと強い力で上を向かされる。
濁った沼のような目が、ちはるをじっと見ていた。
「気の強い娘は嫌いじゃないよ。弱いのは、すぐに死ぬからつまらない」
ちはるはごくりと唾を飲んだ。ちはるを見つめる濁った目の奥に、魑魅魍魎がうごめいている気がした。
「弱い者を強くするのは大変だが、強い者を弱くするのは簡単さ。ぽっきり心を折ってやればいいんだからな」
腹の底から込み上げてくるような悪寒が、ちはるの全身を駆け巡る。
「そうだなあ、若い女子ならやっぱり、男たちに体を汚させるのが手っ取り早いかねえ。ああ、決して死なせやしないから安心おし。いざとなったら、とろんと正気を失う薬をくれてやるから」
ちはるは総毛だった。
この男の手に落ちたら、骨の髄までしゃぶりつくされてしまう――皮も肉もすべて剝ぎ取られ、干からびた骨まで砕かれてしまうような恐ろしさが、ちはるを襲った。この男から逃れる術はないのか。

顎をつかんでいた手が、ちはるの頬を撫で回す。嫌悪と恐怖に叫び出したくなる衝動を、ちはるはこらえた。

何とか気を強く持ち直して、ちはるは言い放つ。

「おとっつぁんが金を借りたのは、一度だけだって聞いてる。何枚も証文があるのは、絶対におかしい」

断言すると、白髪頭の男は面白いものを見たように目を細めた。

「おとっつぁんが、おまえに嘘をついたんだろう。一度だけのつもりが、二度、三度――借りる額も、どんどんでかくなっていく。よくある話さ。証文を見りゃわかる」

ちはるは歯を食い縛り、拳で殴りつけるように男の手を振り払った。

「証文が嘘をついてるってこともあるでしょう！　こんな紙っ切れ、あんたたちなら、どうとでもできるでしょうよっ」

男は白髪頭をかきながら立ち上がり、首をかしげる。

「わしが証文を偽造したとでも言うのかい。その証は？　町方の旦那に確かめてもらってもいいんだよ」

戸口で待っている男たちが、ぐひひと嫌な声を上げて笑う。明らかに、町方の旦那に訴えても無駄だと高をくくっている。

ちはるはうつむいた。

おそらく目の前にいる男たちは、幾人もの岡っ引きや同心に袖の下を握らせているのだろう。ちはる一人では、とても太刀打ちできない。

だが、それでも身に覚えのない借金まで認めるわけにはいかなかった。認めたら最後、地獄の底なし沼に沈んでしまう。

ちはるの両親を陥れた罠がどんなに狡猾であったとしても、きっと抜け道はあるはずだ。その抜け道をふさぎきれずにいるから、借金取りたちは手荒な真似をしてまで強引に、ちはるを連れていけないのではないか。

そこに賭けるしかない――ちかるは膝の上で両手を握り固めた。

「この証文をお奉行所へ持っていって、お奉行さまに確かめてもらう」

目の前にいる男たちも、まさか町奉行までは手を回せまいという一心で、ちはるは告げた。しかし最後の頼みの綱を断ち切るように、白髪頭の男は喉の奥でくくっと笑う。あとの二人も腹を抱えて大げさに笑い出した。

「馬っ鹿だなあ。おめえみてえな小娘が行ったって、奉行に会えるわけねえだろう」

「それに、一度きりだろうが何だろうが、おめえの父親がうちの旦那から金を借りた事実は消えねえんだぜ。お白洲の上で、ちゃんと金を返せと仕置きされてえのか？　あはは――」

不意に笑い声がやんだと思ったら、聞き慣れぬ声が飛び込んできた。

「奉行所へ行くまでもねえ。おれが証文を確かめてやるよ」
ちはるは顔を上げた。
腰高障子に手をかけていた中年男が苦悶の表情を浮かべている。
中年男の手をつかんでいるのは、こざっぱりとした鉄紺の着流しをまとった男だ。年の頃は二十七、八か。三十は超えていないように見える。悪臭は漂ってこない。
戸の外で呆然としていた若い男が、はっと我に返った顔で拳を振り上げた。
「てめえ！　兄貴を放しやがれっ」
鉄紺の男は振り向きざまに、つかんでいた中年男を突き放す。勢いよく殴りかかろうとしていた若い男の拳は、中年男の顔面にめり込んだ。
「あうぅっ」
中年男が地面に崩れ落ちる。思わぬ形で「兄貴」を殴ってしまった若い男は、顔面蒼白になった。慌てて地面にしゃがみ込む。
「兄貴、すいやせん！　大丈夫ですかいっ⁉」
地面に倒れた中年男はうめき声を上げるだけだ。
白髪頭の男が鋭い殺気を戸口に飛ばす。
「てめえ、誰だ⁉」
戸口に向き直った鉄紺の男は着物の裾を風に揺らして腕組みをする。

「工藤怜治ってもんだ」
ちはるは息を呑んだ。
この男が工藤怜治か――！
死んだ父から何度も聞かされた名だが、ちはるが会うのは初めてだ。
白髪頭の男が片眉を吊り上げた。
「火付盗賊改の狂犬――いや、今は武士の身分を捨て、ただの町人となっていたんだったな」
ちはるはとっさに口を押さえた。驚きのあまり、叫んでしまいそうになる。
工藤怜治が武士の身分を捨てた――それは、いったい、いつのことだ⁉
ちはるは口を押さえたまま深く息を吐き、また吸って、どくどくと騒ぐ胸を落ち着かせようと努めた。
「何かあったら工藤さまを頼る」と父は言っていたが、いざ頼りたい時には行方がわからず、頼れなかったのだ。それがなぜ、今頃になって、ここへ現れたのか。
ちはるは横目で怜治を見た。白髪頭の男も、ねっとりと探るような眼差しを怜治に向けている。
怜治は笑って、ふたつの眼差しを首を振って交互に受けた。
「へえ。二人とも、おれを知ってんのかい」

怜治は敷居をまたいで、白髪頭の男に歩み寄った。でっぷり太った白髪頭の男の腹に体が触れる寸前で、ぴたりと足を止める。

「それにしても、ずいぶん耳が早えな。『本所の白狸』さんよぉ。あだ名とは真逆に、腹ん中は真っ黒らしいじゃねえか」

息を吹きかけるように唇をすぼめて、怜治は白髪頭の男に顔を寄せる。

「親からもらった名は、留五郎ってんだったな」

白髪頭の男は眉根を寄せて、小さく舌打ちした。どうやら留五郎という名は、普段使っていないらしい。借金の取り立てに来る男たちが、ちはるに名乗ったことは、一度たりともなかった。

怜治は留五郎から顔を離すと、にやりと笑って続ける。

「おまえさん、口入屋を営む裏で、あこぎな金貸しをやっているんだろ。馬喰町の公事宿に出入りしている公事師とも、仲がいいんだってなぁ」

公事宿とは、訴訟や裁判のために地方から江戸へ来た者を泊める宿である。訴状の用意や、訴訟の手続きなど、訴訟人の補佐を公に認められている。

本来であれば公事宿が行うべき諸々の仕事を請け負う者を公事師という。弁が立つ浪人や、町役上がり多いようである。訴訟人の偽称など、公事師が絡む揉め事もあり、公には認められていない。

怜治は留五郎を押しのけて、風呂敷に包まれていた紙を一枚手に取った。上がり口の前まで来ても、やはり怜治からは悪臭が漂ってこない。

「あれえ？」

怜治が素っ頓狂な声を上げた。

「一番新しい日づけが今年の如月（旧暦の二月）二十日とは、おかしいじゃねえか。こりゃあ、ちはるたち親子三人が夕凪亭を追い出されたあとの日づけだぜ。なあ留五郎、この借金証文はおかしいんじゃねえのか」

留五郎は苦虫を噛み潰したような顔で天井を仰いだ。

「おかしいのは、てめえの頭だろう。その娘たちがこの長屋へ越してきた日にちを、なぜ、てめえが知っているんだ。その頃てめえは、まともに動けなかったはずだぜ」

「へえ、よく知ってんなあ。さすがは『本所の白狸』さんだ」

怜治は感心しきりの表情で、ひらひらと紙を宙に揺らした。

「あちこちに目と耳を持っているようだが、おれの様子を誰に聞いた？　そいつが嘘をついているとは思わねえのか」

留五郎のこめかみが、ぴくりと動く。怜治は、ふっと浅く笑った。

「おれのこの恰好を見て、『ああ、工藤怜治は確かに町人になっていた』と思ったんだろうがよぉ。この町人髷も、腰から外した刀も、すべて芝居だったらどうする」

留五郎は気を静めるように、ゆっくりとまばたきをした。
「本当は武士の身分を捨てておらず、酔狂で町人に身をやつしているとでも言うのか？」
怜治は鼻先で軽く笑う。
「酔狂で町人姿になるはずがあるかよ。火盗改が変装するとしたら、理由はひとつだぜ」
ちはるは小首をかしげながら怜治を見やる。怜治は鼻歌でも歌い出しそうな表情で、手にした紙を留五郎の顔の前にかざした。
留五郎が小さく唸る。
「つまり、今もお勤めの最中だと言いてえのか」
「どうだろうなぁ」
怜治はぐるりと首を回して、留五郎に背を向けた。風呂敷の上の紙をもう一枚取ると、素早く一瞥する。
「これも日づけがおかしいなぁ」
怜治は次々と紙に目を通していく。
「これは借り主の名が違うじゃねえか。ちはるの父親は『千太郎』だが、この証文には『壬太郎』と書いてあるぜ。――おっ、これも『壬太郎』だ」
留五郎は、ふんと鼻を鳴らす。
「間違えて持ってきちまったんだろう」

「へえ。じゃあ、これも間違いなんだな」
　怜治は紙の束を留五郎に突き出した。
「それ全部、千太郎とは違う名だぜ。まさか別人の借金まで、ちはるに押しつけようとしたわけじゃねえよなあ？」
　留五郎はしかめっ面で紙の束を引ったくる。
「この長屋を出たあと、まだ取り立てるやつらがいるんだよ！　そいつらの証文も、同じ風呂敷に包んできただけじゃねえか」
　怜治は探るような目で、留五郎の顔をじっと覗き込んだ。
「それじゃあ借金証文の嵩増しで、いたいけな小娘をびびらせようとしたわけじゃねえんだな？」
「あたりめぇよ」
　と言いながら、留五郎の顔は悔しそうにゆがんでいる。
　怜治はしたり顔でうなずいた。
「そりゃあよかった。『本所の白狸』さんは、堅気の娘を脅すような、けちな真似はしねえんだなぁ」
　怜治は何枚かの紙をまとめて、びりびりと破き出した。
「てめえっ、何しやがる！」

留五郎が右手で怜治の襟をつかみ上げた。左手は、さっき引ったくった紙の束をしっかりと握っている。

怜治はけろりとした顔で、留五郎の右手首をつかんだ。

「ぐっ――」

留五郎の顔が強張り、右手がぶるぶると震え出す。怜治はにやりと笑った。留五郎が怜治の襟から手を放す。

怜治は乱れた襟元を直すと、留五郎に真正面から向き直った。

「何だよ。間違った証文を破いてやっただけだろう。取っておくと、まぎらわしいからよお」

怜治は風呂敷の上に残っていた数枚の紙をつかんだ。

「証文として使い物になるのは、これと、これ――」

怜治は二枚を小脇に挟んで、残りを破り捨てた。留五郎のこめかみが、ひくひくと動いている。

「だが、この一枚は気に入らねえなぁ」

怜治は脇の下から一枚を取り出して、じっと見つめた。

「ほら、千太郎の名が書かれたところに、別の名が重なっているだろう」

促されて、ちはるも紙を覗き込む。安っぽい墨と紙のにおいが鼻先に漂ってきた。

「こりゃあ、上か下に置いた紙の字が写ったんだろうなぁ。墨が乾ききらねえうちに、二枚の紙を重ねちまったんだろうよ」

はっきりと見えるその文字に、ちはるは愕然とした。父の名と重なっているのは、ちはるもよく知っている男の名だ。

「久馬――！」

ちはるの頭に、かっと血が上る。

「何で、久馬の名がここに⁉」

ちはるはとっさに怜治の顔を見た。

「久馬は、おとっつぁんとおっかさんを騙した男だ！　うちをめちゃくちゃにして、乗っ取った男だよっ」

上がり口で両足を踏ん張り、ちはるは叫んだ。

「久馬がうちに来たせいで、夕凪亭は、お客の信用を失ったんだ。近所のみんなが、おとっつぁんの料理を喜んでくれていたのに。毎日食べにきてくれる常連さんだっていたのに。久馬が全部、ぶち壊したんだっ」

ちはるは肩で息をつきながら、唇をわななかせた。

怜治が静かに留五郎を見すえる。

「本所松井町一丁目にあった料理屋、夕凪亭の雇われ料理人、久馬――今は夕凪亭を改

装して新しく開いた料理屋、真砂庵の主だが――そいつも、おめえんとこから金を借りてんのか？　千太郎の証文の上か下に置いてあったのは、久馬の借金証文か。久馬が勝手に千太郎の名を使って、多額の金を借りてたってことはねえか」

留五郎は仏頂面で怜治を睨みつける。

「知らねえなあ。久馬って名の客は、何人かいたかもしれねえがよぉ」

「そうかい、覚えがねえかい」

怜治は紙を折り畳んで懐にしまった。

「だが、この証文は怪しいぜ。信用できねえから、火盗改の柿崎詩門に預けて、調べてもらおう」

留五郎の目が鋭く尖った。人を刺しかねないような剣呑な光を放っている。

怜治はへらりと笑った。

「覚悟しとけよ。火付盗賊改の詮議と聞けば、鬼も怯えて小便漏らすっていうからな」

火付盗賊改――略して火盗改は、放火、盗賊、博打を取り締まる公儀の役職である。

町奉行所が手を出せない武士や僧侶なども、身分を問わずに追って捕縛し、手荒い取り調べを行うことで世に知られている。苛烈な拷問で罪人を自白へ追い込むのだが、厳しい責め苦に耐えかねて、無実の者も罪を認めてしまうという。

また、火盗改は凶悪な罪人たちを相手にすることが多いため、追跡中の斬り捨ても許さ

れている。
留五郎は眉間に深くしわを寄せて、怜治から目をそらした。
「はったりを噛ますんじゃねえよ。町人に変装して咎人を追っている最中だというんなら、懐にしまったその証文だって、てめえが自ら詮議すりゃいい話さ。柿崎さまに預ける理由なんてねえはずだ。やっぱり、てめえは、すでに武士じゃねえんだろう」
吐き捨てるように言う留五郎の肩を、怜治は悠然と叩いた。
「じゃあ詩門に確かめてみな」
留五郎の目が躊躇するように宙をさまよった。怜治は満足そうに口角を引き上げて、脇の下に挟んであった紙を取り出す。
「これが本物の証文だとすると――やっぱり借りた金は返さなきゃならねえよなぁ」
ちはるは唇を噛んで、うつむいた。
借りた金は返さなきゃならねえ――至極まっとうな意見だ。
だが、いつの間にか膨れ上がっていた法外な利息で、借金は何倍にもなっている。残った借金証文がたった一枚だとしても、やはり、ちはるには返せない。
留五郎が気を取り直したように笑った。
「五十両だ。びた一文まけられねえよ。金を返せなきゃ、娘の体で返してもらうだけさ」
ちはるの上に絶望が降り注ぐ。

もう終わりだ……。

五十両など、今のちはるに払えるはずがない。米や味噌を買う金すら、もうないのだ。

やはり、ちはるは一生、女郎屋の中で飼われ続ける運命なのか。

そして梅毒にでも罹って、客を取れなくなったら、捨てられるのだ。死んだら、投げ込み塚か。両親と同じ墓には入れてもらえまい。

ちはるの瞼の裏に、本所菊川町一丁目の天龍寺が浮かぶ。両親を弔ってくれた寺だ。

住職である慈照の美しい法衣姿を思い出すと、ちはるの目に涙がにじんでくる。

幼い頃から、慈照には優しくしてもらった。店で仕事に追われる両親に代わって、ちはるに読み書きや繕い物を教えてくれたのも慈照だった。

ずっと慈照に憧れていた。観音さまのように麗しく優しい慈照に褒めてもらえると、天にも昇る心地だった。「お食べ」と言って差し出してくれる菓子を一緒に頬張る時は、夢心地だった。

けれど、もう会えない――。

雇った料理人に騙されて、父は営んでいた料理屋を乗っ取られてしまった。何とかしようともがく中で、一度だけ金貸しに金を借りたが、悪い流れは断ち切れなくて、両親は失意の中で死んでゆき、多額の借金とともに、ちはる一人が残された。

なぜ、こんな目に遭うのか。ちはるが、いったい何をしたというのだ。

時を巻き戻せるならば、久馬を雇い入れる前に戻りたい。親子三人で夕凪亭を切り盛りしていた、あの幸せだった頃に――。

留五郎の下卑(げび)た笑い声が、ちはるに絡みつく。

「観念しな。人生、あきらめが肝心だぜ」

「じゃあ、おれが買うよ」

留五郎の言葉をさえぎって、怜治の声が部屋に響き渡った。

「ちはるの人生は、おれが買ってやる」

顔を上げれば、まっすぐに見つめてくる怜治の力強い目とぶつかった。

ちはるを見つめたまま、怜治は懐に手を入れる。取り出したのは、小さく折り畳んだ半紙だ。

「十両入ってる」

怜治は半紙で包んだ十両を留五郎の前に突き出した。留五郎が、むっと顔をしかめる。

「ふざけるな。借金は五十両だぜ」

「利息は帳消しにしろよ」

怜治は留五郎の手に金の包みを押しつけた。

「偽造した証文を交ぜて持ってきたの、黙っててやるからよぉ」

怜治は強引に留五郎の手を開くと、金の包みを無理やり握らせた。

「叩けば、いくらでも埃の出てくる身だろう。下手に揉め事を起こさねえほうがいいと思うがなぁ」

留五郎は渋面で、自分の手の中の包みを見つめた。怜治が幼子をあやすように、留五郎の背中をさする。

「千太郎が借りた金は十両。これで全部返した。文句はねえな？　もしあるんなら、これから、おれと一緒に火盗改のお頭の屋敷へ行こうぜ。どんな手順で証文を作ったのか、じっくり体に聞いてやるよ」

火付盗賊改の役宅は、頭の拝領屋敷に置かれており、そこに白洲や吟味席、拷問部屋などもある。

留五郎は渋面のまま、黙って金の包みを懐にしまった。怜治は満足そうにうなずく。

「ちはるには金輪際、近づくんじゃねえぞ」

怜治は留五郎に見せつけるように、ゆっくりと最後の一枚を破り始めた。

ちはるたち親子を苦しめていた紙が、どんどん小さくなっていく。紙に書かれた文字は細かくちぎられ、父が死ぬまで悔いていた借金が消えていく。

ちはるは手妻でも見ているような心地で、怜治の手元を見ていた。

破り捨てられた借金証文が、ただの紙屑となって土間に積もる。

開け放たれたままの戸から入ってきた風にあおられ、ちぎれた紙片たちは吹雪のように

宙に舞った。
留五郎はいまいましそうに顔をゆがめて、風に舞う紙片から目をそらす。
「てめえ、このままただで済むと思うなよ」
どすの利いた留五郎の声に、怜治はただ笑った。
留五郎は舌打ちをして、踵を返す。荒々しい足取りで部屋の外に出ると、まだ地面に倒れていた中年男を蹴り飛ばした。
「いつまで寝ていやがるんだ！　帰るぞっ」
「へ、へいっ」
みっつの足音が、どぶ板を踏み鳴らして去っていく。
戸口の向こうに目を向けていた怜治が、上がり口に座り込んだままでいた大家を振り返った。大家は「ひっ」と小さな悲鳴を上げて、姿勢を正す。
「さて、店賃だったな」
大家は首振り人形のように、こくこくとうなずいた。
「いくら溜まってるんだ？」
大家は指を折りながら数える。
「ええと、ひと月の店賃が五百文なんで――一両です」
怜治は眉間にしわを寄せて、大家を睨む。

「ちょっと待て。何で一両なんだよ。今は葉月（旧暦の八月）だぜ。ちはるたちが越してきたのは如月だから、一両になるはずがねえだろう」
大家は唇を尖らせて、怜治を睨み返した。
「米や味噌の代金も立て替えてやったんですよ。それと、ふた親の薬代もね。――ちょいとお待ちください」
大家はいったん出ていくと、そろばんと帳面を手にして駆け戻ってきた。
「ほら、ここにちゃんと書きつけてあるでしょう」
上がり口で帳面を開いて、大家はそろばんを弾いた。
「どうです、間違ってないでしょう？」
大家は胸を張って、そろばんを怜治に見せた。怜治は眉根を寄せて、帳面を指差す。
「ここ、二回続けて足したぜ。それと、ここも間違ってた」
「えっ」
大家は目を見開いて帳面を凝視した。怜治が慰めるように大家の肩を叩く。
「帳面のつけ方が、ちょいとわかりづらかったな。最初から、読み上げてみな」
大家は素直にうなずいて、帳面の数字を指で追いながら読み上げていく。今度は怜治がそろばんを弾いた。
「ほら、どうだ。一両で釣りがくるだろう」

大家はもう一度そろばんを弾き直して、納得顔になった。怜治が袖の中から一両を取り出して、大家に渡す。

「では、釣り銭を――」

大家が帯に下げた巾着（きんちゃく）に手をかける。その手を怜治が制した。

「釣りはいらねえよ。立て替えてもらった米や味噌の代金に、利子をつけてなかったじゃねえか」

大家は、むっと顔をしかめる。

「借金取りなんかと一緒にしないでおくれ。ちゃんと払ってもらえれば、こっちはそれでいいんだから」

大家は巾着の中に一両をしまうと、釣りを取り出して怜治に突き出した。怜治は苦笑しながら受け取る。

大家が、ちはるを振り返った。

「このまま、ここに住むんなら、来月また店賃をもらいにくるよ。あんたは払いが不安だから、月払いさ。出ていくんなら、今月末までに引っ越しを済ませておくれ」

ちはるがうなずくと、大家は敷居をまたいで足早に帰っていった。

怜治が腕組みをして、ちはるに向き直る。

「さて、おれたちも行くぞ」

「どこに」
「日本橋室町三丁目の、朝日屋さ」
ちはるは眉間にしわを寄せて首をかしげる。
「朝日屋……？」
怜治は後ろ頭をかいた。
「知らねえか？　まあ、先月できたばかりの小さな旅籠だから、無理もねえがよ。おまえはこれから、朝日屋で働くんだ」
ちはるは胸の前で拳を握り固めた。
借金の肩代わりをしてもらったからには、言われた通り、そこで働くしかあるまい。しかし、旅籠とは――。
「あたしは飯盛り女になるの？」
飯盛り女は旅籠で給仕をする女であるが、客の求めに応じて色も売る。公儀黙認の私娼である。
やはり金に換えられるのは我が身だけかと、ちはるは重い息をつく。
怜治は顔をしかめた。
「早とちりするなよ。朝日屋に飯盛り女は置かねえ。朝日屋は、美味い料理で客を呼ぶんだ」

美味い料理で客を呼ぶ――ちはるの脳裏に、夕凪亭で包丁を握る在りし日の父の姿が浮かんだ。

「おまえは朝日屋の調理場で働くんだ」

怜治が静かに、ちはるを見すえた。

「千太郎に仕込まれて、おまえも夕凪亭の調理場に入っていたんだろう？　おまえの鋭い鼻は夕凪亭の料理に不可欠だと、千太郎が自慢してたぜ。女だが、いずれ自分の跡を継がせて店を任せるんだと、嬉しそうに言ってた」

ちはるは唇を震わせた。

「おとっつぁん……」

調理場の仕事を任せてもらっても、いずれ自分は婿を取って、その男に店を預けるものだと思っていた。だから、ちはるが店の調理場で働き続けることを認めてくれる男でなければ、婿に迎えないと決めていたのに。

父が、ちはるを跡継ぎにしようと考えてくれていたなんて――。

父との思い出が走馬灯のように頭の中を流れていく。

初めて父に包丁の握り方を教わったのは、まだ十にもならなかった頃だ。切ったのは確か胡瓜だったから、あれは夏のことだったか――。

はらはらした様子で心配そうに目を細めて、ちはるの手元をじっと見つめていた父の表

情を、今でもまだ覚えている。よそ見するなと叱られながら、不ぞろい過ぎて店に出せない胡瓜の輪切りを、ちはるは大量に作り続けたのだった。

その日の夕食は、胡瓜とわかめの酢の物だった。魚も肉も使っていないので、天龍寺へ届けて、慈照にも食べてもらった。

「何だよ、すぐに室町へ来られねえ事情でもあるのか？」

怜治の声に、ちはるは引き戻された。

楽しかった昔は一瞬で記憶の彼方へ飛んでいき、自分が今いる場所は薄暗い貧乏長屋なのだという現（うつつ）が目の前に広がった。

ちはるは目を伏せた。硬い板間に敷かれた筵（むしろ）のぼろさに泣きたくなる。

怜治が狭い部屋の中をぐるりと見回した。

「まとめる荷物もろくにねえだろうが――挨拶（あいさつ）しておきたいやつでもいるのか」

すぐに慈照の顔が頭に浮かんだ。両親の墓の件もある。日本橋へ行く前に、やはり挨拶をしておいたほうがよいだろうか……。

ちはるの耳に、ふと留五郎の声がよみがえる。

――火付盗賊改の狂犬――いや、今は武士の身分を捨て、ただの町人となっていたんだったな――。

ちはるは怜治を見上げた。

確かに、以前は火盗改の同心だった。だが、今は――？
この男の思惑が、ちはるには読めない。
工藤怜治はまだ武士なのか、それともすでに武士をやめているのか、それすら正確につかめていない。
ちはるは口を開いた。
「あんた、いったい――」
「仕方ねえなあ」
正体を問おうとしたちはるの声を、怜治がさえぎった。
「それじゃ、明日また迎えにきてやるから。挨拶すべき者には、ちゃんと会っておけ」
ちはるの返事を待たずに、怜治は踵を返す。
「あ、待って――」
「逃げるなよ？」
戸口で振り返った怜治の言葉に、ちはるは声を失った。
逃げる――？　いったい、どこへ――。
ちはるは無言で顎を引いた。
逃げる場所なんて、どこにもないじゃないか。
ちはるは歯を食い縛った。

旅籠でどんな仕事をさせられるのか――本当に台所働きだけで済むのか――工藤怜治という男の正体も、何もかもわからないことだらけだが、嫌だからといって逃げ込める場所など、ちはるには江戸中どこを探してもないのだ。

留五郎に連れていかれるよりは断然ましだろうと自分に言い聞かせ、怜治についていくしかないと心を決める。

「じゃあ、また明日な」

怜治は口角を引き上げて、足早に去っていく。

今の身分が武士か否かを問いただす気力も失せて、ちはるは怜治を呼び止めぬまま、ただ遠ざかっていく足音をじっと聞いていた。

足音が完全に聞こえなくなってから、部屋の中を眺め回して、大きなため息をつく。

狭くて薄暗い長屋の次は、先月できたばかりの小さな旅籠か――。

いつか夕凪亭に帰りたいと願っても、夕凪亭はもうない。

女一人で生きていくためには、這いつくばって、泥水をすする覚悟を持たねばならぬのだ。

ちはるは目を閉じた。

生まれ育ったこの町に別れを告げねばならぬと観念して、震える拳を叱咤する。